

共同発表：東大寺修二会における「法華音曲」の伝承

柴 佳世乃・近藤 静乃

十一面観音悔過を主軸として、1270 年もの間欠かすことなく勤修されてきた不退の行法——東大寺修二会。3 月 1 日に始まる本行の 14 日間、初夜と後夜冒頭の荘嚴作法において、読役の平衆が法華経から抜粋した文言に節をつけてリズムカルに唱誦する「法華音曲」がなされている。この法華音曲がいつどのような経緯で修二会次第に盛り込まれたかは定かでなく、その詞章や音曲の歴史的検討はこれまでなされてこなかった。本共同発表では、院政期に法華経読誦が芸道化した〈読経道〉を傍らに置きつつ、この法華音曲を具体的に検討する。法華音曲は、中世に行われた読経音曲の面影を残す現行例として極めて貴重な存在なのである。歴史的・文化的側面から柴が、音曲的側面から近藤が発表を行い、東大寺修二会「法華音曲」の芸態の始原や文化的意義に迫る手がかりとしたい。

1. 読経音曲の相承と東大寺

柴 佳世乃（千葉大学教授）

法華経の読誦は、平安時代を通じて僧俗にわたる信仰に支えられながら、芸能的要素を多分に含んで行われるようになり、院政期に芸道化がなされた。これを〈読経道〉と言い、後白河院周辺がそのエポックとみなされる。読経道とは、字声を糺す、清濁を分かち、音曲を習う、という三つの柱から成る『法華経』読誦に関わる芸道であり、師資相承や口伝が存する。読経道口伝書の嚆矢として、能譽によって『読経口伝明鏡集』（弘安 7 年 [1284]）が著された。三つの柱のうちの音曲こそ、読経道を芸道たらしめる要素で、特有の「読経音曲」が中世を通じて詠唱されていたのである。それは「四句甲乙」「叩」といった骨格を持つものであった。前近代まで播磨の書写山にて行われていたようだが、現在は伝わっておらず、しかしわずかに東大寺修二会の法華音曲に読経道との関連が見出せる。前近代の東大寺における法華音曲の伝承については未だ調査の途上にあるが、その唱誦法は中世の読経道の芸態を汲んでいる可能性が高い（柴『読経道の研究』風間書房[2004]など参照）。

本発表では、上記の概要と研究の現在とを整理しまとめた上で、とりわけ東大寺および南都との読経道との関わりについて考察する。読経をよくした能読に南都僧の名が見えること、『読経口伝明鏡集』の書写に修二会練行衆が関わっていること、そして現行の東大寺修二会の「法華音曲」に読経道口伝書に見える用語が用いられていることなどをもとに、中世の読経道の実態と、東大寺修二会の読経について考えてみたい。

## 2. 東大寺持宝院蔵『大乘妙典』における「法華音曲」の唱誦法

近藤 静乃（東京藝術大学非常勤講師）

東大寺塔頭の持宝院蔵『大乘妙典』は、法華経八卷全二十八品から修二会の初夜・後夜で唱誦される経文を抜き書きし、唱句ごとの配役および「甲二々」「乙叩」等の曲節名、句点や節博士を付記して一冊の折本に収めた抄本である。奥書によると、明治16年に権中講義の平松晋海師が、(上司)永純師の応需によって書写したもので、以来持宝院で代々護持されている。この『大乘妙典』は、東京文化財研究所芸能部編・佐藤道子担当『東大寺修二会の構成と所作』において全文が収録されているが、音曲構造を特色づける句点の位置と節博士との関係については、一部写真を掲載するのみで詳らかにされていなかった。このほど、柴佳世乃との共同研究により、持宝院現住職の上司永照師を通じて『大乘妙典』の閲覧がかない、合わせて、先代の永慶師が昭和27年度修二会に権處世界で参籠するにあたり、その唱誦法の委細を記した『読経覚書』もお示しいただいた。本発表では、現行伝承に直接繋がるこれらの資料によって、法華音曲の唱誦法を音楽的側面から体系的に捉えるとともに、中世の読経音曲の実像を読み解く布石のひとつとしたい。

本発表は、科学研究費補助金(基盤研究 B[21H00505]、「仏教儀礼の音曲復元から見る中世文化の総合的研究」研究代表者:柴佳世乃)による研究成果の一部である。